

根本的に対立している 二つの平和共存政策

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（六）

外文出版社

北京

根本的に対立している 二つの平和共存政策

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（六）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（1963年12月12日）

外文出版社

北京

根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（六）

『人民日報』編集部
『紅旗』誌編集部

（一九六三年十二月十二日）

ソ連共産党第二十回大会くらい、平和共存問題は、フルシチョフ同志らがもつとも多く語つた問題であるといえよう。

ソ連共産党指導部は口ぐせのように、かれらがレーニンの平和共存政策に忠実であり、しかもそれを創意的に発展させたといっている。かれらは、世界各国人民が長期にわたる革命闘争を通じてかちとつた一連の勝利をみな、自分たちの「平和共存」のてがらとして書きしるしている。

ソ連共産党指導部は、帝国主義、とくにアメリカ帝国主義が平和共存に賛成しているとやっきになつて宣伝し、中国共産党とすべてのマルクス・レーニン主義的政党が平和共存に反対して

るとやつきになつて中傷している。ソ連共産党中央委員会の公開書簡はまた、中国が帝国主義と「戦争をおこす競争」を主張しているなどと、でたらめさえいつている。

ソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義を裏切り、プロレタリア世界革命を裏切り、全世界の被抑圧人民と被抑圧民族の革命事業を裏切っている自分たちのかずかずの言動が、レーニンの平和共存政策に合致しているといいくるめてゐる。

だが、「平和共存」というこの四字が、果たしてソ連共産党指導部のマルクス・レーニン主義にたいする裏切りのお守りになりうるだろうか。それはならない、ならない、絶対にならない。われわれのまえには、根本的に対立した二つの平和共存政策がよこたわつてゐる。

一つはレーニンとスターリンの平和共存政策であり、これはつまり、中国の共産主義者をふくむすべてのマルクス・レーニン主義者の主張している平和共存政策である。

もう一つはレーニン主義に反する平和共存政策であり、これはつまり、フルシチョフらの主張しているいわゆる「平和共存」の総路線である。

いまここで、われわれはレーニンとスターリンの平和共存政策がどんな政策であるか、またフルシチョフらのいわゆる「平和共存」の総路線がどのようなものであるかをみることにしよう。

レーニンとスターリンの平和共存政策

社会主義国家が社会制度の異なる国ぐにと平和共存政策を実行するという思想は、レーニンが提起したものである。この正しい政策は、レーニンとスターリンに指導されていたソ連共産党とソ連政府が長期にわたつて実行してきたものである。

十月革命のまえには、社会主義国家は世界に一つもなかった。社会主義国家と資本主義国家との平和共存という問題は、当然存在していなかったのである。しかし、はやくも一九一五年と一九一六年に、レーニンは帝国主義にたいする科学的分析にもとづいて、「社会主義はすべての国で同時に勝利することはできない。それははじめは一国または数カ国で勝利するが、他の国ぐには、なおしばらくブルジョア的あるいは前ブルジョア的な国家にとどまるであろう」と予見したのである。（「プロレタリア革命の軍事綱領」。『レーニン全集』第三三卷）これはつまり、ある時期において、社会主義国家が資本主義国家や前資本主義国家と世界で同時に存在する状態が出現するであろうということである。社会主義制度の本質から、社会主義国家は平和的外交政策を実行できるだけであるということが規定されている。レーニンは、「ただ労働者階級だけが権力を奪取したのち、口先だけではなく、実際に平和政策を遂行することができるのであ

る」とのべたことがある。(「現在の政治情勢についての決議草案」。『レーニン全集』第二五卷)レーニンのこのような観点が、平和共存政策の思想的基礎であるといえるのである。

十月革命が勝利したのち、レーニンは何回となく全世界にむかって、ソビエト国家の平和的外交政策を宣言した。だが、帝国主義者はひたすら、新しく誕生した社会主義共和国を赤子のうちになんとかしてしめ殺そうと考えた。かれらはソビエト国家にたいして武力干渉をおこなった。このような事態をまえにして、ちょうどレーニンが指摘したように、「社会主義共和国を武力で防衛せずには、われわれは存続することができなかった」のである。(レーニンがロシア共産党(ボ)第八回大会でおこなった「中央委員会の総括報告」。『レーニン全集』第二九卷)

一九二〇年になって、偉大なソビエト人民は、帝国主義の武力干渉にうちかかった。こうして、ソビエト国家と帝国主義国家とのあいだに、一定の相対的な均勢が形成された。数年にわたる実際のな力くらべをへて、ソビエト国家はしつかりとその足をふまえ、戦争から平和的建設へ移りはじめた。まさにこのような状況のもので、レーニンは平和共存政策の思想をうちだしたのである。じじつ、帝国主義がいやおうなくソビエト国家と「共存」しなければならなくなったのも、まさにこの時からのことである。

レーニンがまだ生きていた時、このような均勢は終始きわめて不安定なものであった。ソビエ

ト社会主義共和国は、資本主義のきびしい包囲のなかにあつた。レーニンは帝国主義の侵略的本性からみて、社会主義と資本主義との平和共存という状態が長くつづけられるかどうかは、まったく保証できないと、いくたびも指摘したのである。

当時の歴史的条件のもとでは、レーニンは、社会制度の異なる国家間の平和共存政策のくわしい内容をまだ規定することができなかった。だが、偉大なレーニンはその時すでに、最初のプロレタリアート独裁の国家のために正しい対外政策を制定し、平和共存政策の基本的な思想をうちだしたのである。

レーニンの平和共存政策についての基本的な思想とはなんであろうか。

第一に、レーニンは、社会主義国家の存在は帝国主義の意向にまったく反したものであると指摘した。社会主義国家が平和的対外政策の実行を堅持しているにもかかわらず、帝国主義はつねに社会主義国家との平和共存をのぞまず、つねにあらゆる可能性を利用し、あらゆる機会をつかんで社会主義国家に反対し、ひいてはこれを消滅しようとしている。

レーニンは、「国際帝国主義は、その客観的な地位からいっても、また自分が体現しているブルジョアジーの経済的利益からいっても、かれらはソビエト共和国とは仲よくやっていくことができない」とのべた。(レーニンがロシア共産党(ボ)第七回大会でおこなった「戦争と平和に

ついでに報告」。『レーニン全集』第二七巻)

レーニンはまた、「ソビエト共和国が長期間帝國主義諸国家とやらんで存在するという事は、考えられない。結局は、どちらか一方が勝利するであろう。だが、この結末がやってくるまでは、ソビエト共和国とブルジョア諸国家とのあいだに幾多のきわめておそろしい衝突がおこることは、さけられない」とのべている。(レーニンがロシア共産党(ボ)第八回大会でおこなった「中央委員会の総括報告」)。『レーニン全集』第二九巻)

それゆえ、レーニンは一度ならず、社会主義国家は帝國主義にたいして、つねに警戒心をたかめなければならぬと強調した。レーニンは、「すべての労働者、農民が会得しなければならぬ教訓は、つねに警戒心をもって、われわれにたいする最大の憎しみを公然と表明している人びと、階級、政府によってわが国が包囲されていることを銘記することである。われわれが、いっどんな襲撃をうけるかわからない状態にあることをおぼえていなければならない」とのべた。(レーニンが第九回全ロシア・ソビエト大会でおこなった「共和国の内外政策について」と題する報告。『レーニン全集』第三三巻)

第二に、レーニンは、ソビエト国家が帝國主義国家と平和共存することができたのは、たまたかによってかちとつたものである、と指摘している。これはソビエト国家が正しい政策をとり、

全世界のプロレタリアートと被抑圧民族の支持にたより、帝國主義の矛盾を利用して、帝國主義国家とくりかえし力くらべをした結果である。

一九一九年十一月、レーニンはつぎのようにのべた。「これはいつもおこることだが、敵は、やつつけられると、和解をしようとするのである。われわれはヨーロッパの帝國主義者のお偉方にむかつて、われわれは平和に同意すると、いくどもくりかえしていつてきた。だが、かれらはロシアを隷属させようと夢みてきたのである。だが、かれらの夢がかならず実現されないものであるということをおぼえてきた。」「(「農村における党活動についての第一回全ロシア会議での演説」)。『レーニン全集』、第三〇巻)

一九二一年、レーニンは、「帝國主義列強が、ソビエト・ロシアを歯ぎしりしてにくみ、これを攻撃しようとするが、われわれはやはりこの考えを放棄したのである。というのは資本主義世界の崩壊がますますはげしくなり、内部の団結がますますよわまり、一〇億以上の人口を擁し、抑圧の苦痛をなめつくした植民地諸国民の反抗が、年ごとに、月ごとに、さらに進むことにはげしくなってきたためである」と指摘した。(「ロシア共産党(ボ)第十回全国代表者会議での閉会の辞」)。『レーニン全集』第三二巻)

第三に、レーニンは、平和共存政策を実行するにあたり、ブルジョア世界の異なった型の國家

にたいして異なった方針をとったのである。

レーニンには、帝國主義から侮辱と抑圧をうけていた国家と友好関係を樹立することをとくに重視した。かれは「帝國主義の抑圧をうけているすべての民族の根本的利益は一致している。」
 「帝國主義の世界政策はまた、すべての被抑圧民族の接近、同盟、友好をうながした」と指摘した。レーニンは、ソビエト国家の平和政策は「ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国を、その周囲にあるますます多くの隣国と日まじに緊密に結合させる」とのべた。(レーニンが第八回全ロシア・ソビエト大会でおこなった「人民委員会の活動についての報告」。「レーニン全集」第三一巻)

レーニンはまた、「現在われわれが提起している主要な任務は、搾取者にうち勝ち、動揺分子を自分の側にひきつけることであり、これは世界的な任務である。多くのブルジョア国家は、動揺しているのである。それらの国は、ブルジョア国家としては、われわれをにくんでいるが、他方、抑圧をうけている国家としては、むしろわれわれと平和についてかたることをのぞんでいる」とのべた。(「全ロシア中央執行委員会および人民委員会の活動について」。「レーニン全集」第三〇巻)

帝國主義国家について、たとえばアメリカについて、レーニンはつぎのようにのべた。アメリカと平和を維持する基礎は、「アメリカの資本家がわれわれに手だしをしないようにさせることである。」
 「われわれの側にはなんの障害もないのである。その他のどの国家の資本家もおなじことであるが、アメリカ資本家の帝國主義こそ障害である。」(「アメリカの『ニューヨーク・イブニング・ジャーナル』特派員の質問にたいする回答」。「レーニン全集」第三〇巻)

第四に、レーニンの提起した平和共存政策は、権力をにぎっているプロレタリアートが社会制度の異なる国家との関係を処理する面での政策である。レーニンはいちども、平和共存政策を社会主義国家の対外政策の全内容としたことはなかった。レーニンは一度ならず、社会主義国家の対外政策のもつとも根本的な原則は、プロレタリア国際主義である、とはつきり指摘した。

レーニンは、「ソビエト・ロシアは、全世界の労働者が資本主義制度転覆をめざす困難なたたかいをたすけることができるのを、このうえもないほこりであるとかんがえている」とのべた。
 (「コミンテルン第四回世界大会とペトログラード労働者・赤軍代表ソビエトへ」。「レーニン全集」第三三巻)

レーニンは十月革命後に公布した平和布告のなかで、すべての交戦国に、即時、領土割譲と賠償のともなわない平和の実現を提案するとともに、ブルジョア国家の階級意識にめざめた労働者につぎのようによびかけた。「多面的な、だんこたる、果敢な活動によって、われわれが平和の

事業と搾取されている勤労大衆をあらゆる隷属とあらゆる搾取から解放する事業を、成功のうち
に最後まで遂行するのを援助せよ。」(レーニンが労働者、兵士代表ソビエト第二回全ロシア大
会でおこなった「平和問題についての報告」。「レーニン全集」第二六卷)

レーニンはロシア共産党第七回大会のために起草した党綱領草案のなかで、つぎのようには
つきり規定している。「先進諸国の社会主義的プロレタリアートの革命運動を支持すること」、
「すべての国の、とくに植民地と従属国の民主主義運動と革命運動を支持すること」、これは党
の対外政策の重要な内容である。(『レーニン全集』第二七卷)

第五に、レーニンは一貫して、被抑圧階級と抑圧階級、被抑圧民族と抑圧民族は、平和的に共
存できるものではないと考えていた。

レーニンは、「コミンテルン第二回大会の基本的任務についてのテーゼ」のなかで、「もつと
も開化した、民主的なブルジョアジーでさえ、いまではもう、生産手段の私有制がぶつかってい
るわざわざいをはらいのけるためなら、どんな欺瞞的手段や犯罪的手段をとることも、いく百万人
の労働者、農民を虐殺することにもしりごみしない」と指摘している。レーニンの結論は、「お
よそ資本家を、多数をしめる被搾取者の意志に平和的に服従させることができるか、平和的、
改良主義的な道を通じて社会主義へ移行できるとかという考え方は、すべて極度に俗物的な愚劣

であるばかりでなく、労働者をロコツにあざむき、資本主義的賃金奴隷制を美化し、真理をお
おいかくすことである。」(『レーニン全集』第三一巻)

レーニンは、帝国主義のいわゆる民族平等の欺瞞性を何度も指摘した。レーニンは、「国際連
盟と協商国がとっている戦後の全政策は、先進国のプロレタリアートと植民地国・従属国のすべ
ての勤労大衆の革命的闘争をいたるところでつよめており、資本主義制度のもとで、各民族の平
和な共同生活と平等が可能であるという小市民的な民族的幻想の崩壊をはやめており、そうす
ることによってこの真実をいつそう明らかに、くつきりとあかるみにだした」とのべている。

(「民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案」。「レーニン全集」第三二巻)

以上がレーニンの平和共存政策についての基本的思想である。

スターリンは、レーニンの平和共存政策を堅持した。スターリンは、ソ連の指導にあたった三
十年間、一貫してこうした平和共存政策を実行してきた。ただ帝国主義と反動派がソ連にたいし
て侵略戦争、あるいは武力挑発をひきおこした時、ソ連ははじめて祖国防衛戦争をおこない、自
衛のための反撃に出ざるをえなかったのである。

スターリンは、「わが国と資本主義諸国との関係の基礎は、二つの対立的な体制が共存できる
ということである。」「資本主義諸国と平和的な関係をたもつことは、われわれがかならず負わ

なければならぬ任務である」と指摘した。(スターリンがソ連共産党(ボ)第十五回大会でおこなった「中央委員会の政治報告」。「スターリン全集」第一〇巻)

スターリンはまた、「双方に協力するという願いがあり、負わされた義務を履行する決意をもち、平等と他国内政に干渉しないという原則をまもりさえすれば、資本主義制度と共産主義制度の平和共存はまったく可能である」と指摘した。(スターリン「アメリカ・ジャーナリズムのいちぶ編集者の提出した質問にたいする回答」。一九五二年四月二日づけ「プラウダ」紙)

スターリンは、レーニンの平和共存政策を堅持するとともに、帝国主義のごきげんをとるために各国人民の革命にたいする支持を放棄することにだんこ反対した。スターリンは、二つの相対立する対外政策が存在しており、「そのうちのいずれかを選ばなくてはならない」と強く指摘した。

一つは、「われわれが各国のプロレタリアートと被抑圧者とをソ同盟の労働者階級のまわりにかたく結集しつつ、今後とも革命的政策をおこなっていく——そのばあいには国際資本は、われわれの前進をあらゆる方法で妨害しようとするであろう。」

もう一つは、「われわれが革命的政策をすてて、国際資本に一連の原則上の譲歩をする——そのばあいには国際資本は、わが社会主義国が『善良な』ブルジョア共和国に変質するようにわれわれを『援助する』ことを、おそろくいやがらないであろう。」

スターリンは例をあげて、「アメリカは、われわれが他の国々にの労働者階級の解放運動を支持する政策を原則的にすてるように要求し、もしわれわれがそういう譲歩にできれば、万事うまくいくだろうといっている。どうだろう、われわれはこうした譲歩をしてもいいだろうか」とのべた。

つづいてスターリンはこれに答えて、いや、「われわれはこうした譲歩をすることはできないし、自分を裏切ることとはできない」とのべた。(「中央委員会と中央監査委員会の四月合同総会の活動について」。「スターリン全集」第一巻)

スターリンのこのことばは、いまでもやはり重要な現実的意義をもっている。たしかに根本的に対立した二つの対外政策がある。たしかに根本的に対立した二つの平和共存政策がある。この二つの異なる政策をよくみわけて、レーニンとスターリンの政策を堅持し、スターリンによって痛烈に糾弾された裏切りの、降伏的な、革命を支持しない政策にだんこ反対し、社会主義国家を『善良な』ブルジョア共和国に変質させる政策にだんこ反対するのは、すべてのマルクス・レーニン主義者の重要な任務である。

中国共産党はレーニンの平和共存政策を堅持している

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、中国共産党が「平和共存の可能性を信じていない」と言

い張り、中国共産党がレーニンの平和共存政策に反対していると中傷している。

事實は果たしてそうであろうか。いや、もちろん、そうではない。

事實を尊重する人ならだれでも、中国共産党と中華人民共和国政府が一貫してレーニンの平和共存政策を実行し、大きな成果をあげていることを、はつきりみてとることが出来る。

第二次世界大戦ご、国際的な階級間の力関係に根本的な変化がおこった。社会主義は一連の国ぐにで勝利をおさめ、社会主義陣営が形成された。民族解放運動は空前の発展をとげ、新たに政治的独立を獲得した一連の民族主義国家が出現した。帝国主義陣営の力は大いによわまり、帝国主義諸国間の矛盾も日ましにするどくなっている。このような情勢は、社会主義国家が社会制度の異なる国ぐにと平和共存政策を実行するのいつそう有利な条件を提供したのである。

このような新しい歴史的条件のもとで、中国共産党と中国政府は、レーニンの平和共存政策を実行する過程で、その内容をゆたかにした。

早くも中華人民共和国の誕生する直前に、毛沢東同志はつぎのよりのべた。「われわれは全世界に声明する。われわれが反対するのは帝国主義制度とその中国人民に敵対する陰謀計画だけである。どのような外国政府であろうと、中国の反動派との関係を絶つことをのぞみ、二度と中国の反動派と結託したりこれを援助したりせず、また人民の中国にたいし、いつわりでない真の

友好的態度をとるかぎり、われわれは平等、互恵、ならびに領土主権の相互尊重という原則を基礎にして、それらの政府と外交関係樹立の問題について交渉する用意がある。中国人民は世界各国の人民と友好的に協力し、国際間の通商事業を回復、発展させることによって、生産の発展と経済の繁栄をはかることを望んでいる。」（「新政治協商会議準備会での演説」。『毛沢東選集』第四巻）

毛沢東同志のだしたこの方針にもとづいて、われわれは、一九四九年九月に中国人民政治協商会議で採択された共同綱領のなかで、また、その後一九五四年九月に全国人民代表大会で採択された中華人民共和国憲法のなかで、平和外交政策をはつきり規定した。

一九五四年、中国政府は有名な平和共存五原則を提唱した。それは、領土保全と主権の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干涉、平等互恵、平和共存である。一九五五年のバンドン会議で、わが国はアジア、アフリカ諸国とともに、五原則をもとにして、十原則を共同して制定したのである。

一九五六年、毛沢東同志はわが国の国際問題を処理する面での実践と経験を総括して、わが国の対外政策の総方針をいつそうあきらかにした。毛沢東同志はつぎのよりのべている。「世界の恒久平和をたたかいたるため、われわれは社会主義陣営にぞくする兄弟的諸国との友好と協力

をいっそう発展させ、平和を愛するすべての国々にとの団結を強化しなければならない。われわれは、われわれと平和的にやっつくことをのぞんでいるすべての国々にと、領土主権の相互尊重と平等互恵を基礎として、正常な外交関係を樹立しなければならない。アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の民族独立解放運動、および全世界のすべての国々にの平和運動と正義のたたかいたいし、われわれは積極的な支持をあたえなければならない。」（「中国共産党第八回全国大会の開会の辞」）

一九五七年、毛沢東同志はまた、つぎのように述べた。

「ソ連との団結を強固にし、すべての社会主義国家との団結を強固にするのは、われわれの基本的方針であり、ここにわれわれの基本的利益がある。」

「つぎはアジア、アフリカ諸国および平和を愛するすべての国々にと人民であり、われわれは、それらとの団結を強固にし発展させなければならない。」

「帝国主義国家については、われわれはその人民と団結しなければならないし、またそれらの国々にとの平和共存をかちとり、いくらかの貿易をおこない、発生する可能性のある戦争を制止しなければならない。だがかれらにたいし、実際的でない考え方をけっしてはならない。」（『人民内部の矛盾を正しく処理することについての問題』）

十四年らい、われわれは国際問題を処理するにあたり、ちがった型の国にたいし、また、同じ型の国でもその国がちがった状況に応じ、それぞれ区別して対処する方針をとってきた。

第一に、われわれは社会主義国家と資本主義国家とを区別している。社会主義国家に対処する時、われわれはプロレタリア国際主義の相互援助の原則を堅持している。われわれは、社会主義陣営諸国の団結をまもり、強めることを、われわれの対外政策の基本方針としている。

第二に、われわれは新たに政治的独立を獲得した民族主義国家と帝国主義国家とを区別している。

民族主義国家の社会政治制度は、社会主義国家と根本的に違っている。しかし、それらの国々には帝国主義と深刻な矛盾をもっている。それらの国々には帝国主義反対、民族独立擁護、世界平和擁護などの面で、社会主義国家と共通の利益をもっている。これこそが、社会主義国家に民族主義国家と平和共存、友好協力の関係をうちたてる広はんな現実的な可能性をもたらしているのである。こうした関係の樹立は反帝勢力の団結を強め、各国人民の反帝共同闘争を促進することに、重要な積極的意義をもっている。

われわれは一貫して、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国との平和共存と友好協力を強固にし、発展させる方針を堅持している。同時に、五原則に違反し、これを破壊している国、たと

えばインドにたいしては、われわれは必要で適切なたたかきをおこなっている。

第三に、われわれは、一般の資本主義国家と帝国主義国家とを区別している。われわれはそれぞれの帝国主義国家にたいしても、区別して対処している。

国際的な階級間の力関係がますます社会主義に有利になる状況のもとで、帝国主義勢力が日ましによまわり、その相互間の矛盾が日ましにするどくなる状況のもとで、社会主義国家が自身の力の強大化にたより、各国人民の革命勢力の発展にたより、民族主義国家との団結にたより、平和を愛するすべての人民のたたかきにたより、帝国主義内部の矛盾を利用して、あれやこれやの帝国主義国家に、ある程度の平和共存関係の樹立に同意せざるを得なくさせることは可能である。

社会制度の異なる国ぐにとの平和共存を堅持すると同時に、われわれは確固としてかわることなくプロレタリア国際主義の義務を履行している。われわれは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の民族解放運動を積極的に支持し、西ヨーロッパ、北アメリカ、大洋州諸国の労働運動を積極的に支持し、各国人民の革命闘争を積極的に支持し、帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対し、世界平和をまもる各国人民の闘争を積極的に支持している。

これらはすべて、一つの目標、すなわち社会主義陣営と国際プロレタリア、トを中核に、団結

できるすべての力と団結し、アメリカ帝国主義とその手先に反対する広はんな統一戦線を結成するということに集中されている。

十数年らい、中国政府は平和共存五原則にもとづいて、社会制度の異なる多くの国ぐにと友好関係を樹立し、経済、文化交流を発展させてきた。中国は前後してイエーメン、ビルマ、ネパール、アフガニスタン、ギニア、カンボジア、インドネシア、ガーナなどの諸国とそれぞれ友好条約、平和友好条約あるいは友好・相互援助・相互不可侵条約を締結した。また、ビルマ、ネパール、パキスタン、アフガニスタンなどの諸国と歴史上残されてきた境界問題を円満に解決した。

中国共産党と中国政府がレーニンの平和共存政策を堅持してかちとつた一連の大きな成果は、誰もこれを抹殺することができないのである。

ソ連共産党指導部が、中国は平和共存に反対しているというデマをデッチあげているのは、下心のあるものである。あばいていえば、かれらの目的は、プロレタリア国際主義を裏切り、帝国主義と結託しているかれら自身のみによくいすがたをおおいかくそうとするためである。

ソ連共産党指導部のいわゆる「平和共存」の総路線

レーニンの平和共存政策にほんとうに違反しているのはわれわれでなく、ソ連共産党指導部で

ある。

ソ連共産党指導部は、かれらの平和共存をこれ以上りっぱなものはないかのように吹聴している。平和共存問題についてのかれらの主要な観点とはどういうものだろうか。

(一) ソ連共産党指導部は、平和共存は現代の社会問題を解決する、すべてを圧倒する最高原則である、とみなしている。かれらは、平和共存は「現代の絶対的至上命令」であり、「時代の無条件の要求」①である、といっている。かれらはまた、「平和共存は、社会の直面しているもっとも主要な問題を解決するのにもっともよい、唯一の実行可能な道であり」②、平和共存の原則は「現代の社会生活全体の基本的な法則」③にならなければならない、といっている。

(二) ソ連共産党指導部は、帝国主義はいまでは平和共存をうけいれることをのぞんでおり、もはや平和共存の障害ではなくなった、とかがえていっている。かれらは、「少なからぬ西側諸国の政府と国家指導者はいま、平和と平和共存を主張しており」④、「平和共存の必要性をますますはっきりと理解してきている」⑤といっている。かれらはとくに、アメリカ大統領が「社会制度の異なる国ぐにのあいだの平和共存の賢明さと現実性をみとめている」⑥と宣伝している。

(三) ソ連共産党指導部は、帝国主義国家、とくにアメリカと「全面的協力」を実行することを主張している。かれらは、ソ米両国が「全人類の幸福のために歩調をあわせて行動し努力する

基礎をさがしだすことができる」⑦、「平和を強固にし、すべての国の真の国際的協力を実行するために手をたずさえて前進することができる」⑧とのべている。

(四) ソ連共産党指導部は、平和共存が「ソ連と社会主義陣営諸国の対外政策の総路線」⑨である、とみなしている。

(五) ソ連共産党指導部はまた、「平和共存の原則が、現にソ連共産党とその他のマルクス・レーニン主義的政党の対外政策の総路線を決定しており」⑩、当面の「共産主義の戦略的基礎」であり、全世界の共産主義者がみな「平和共存をめざすたかいを自分の政策の総原則にする」⑪必要がある、とみなしている。

(六) ソ連共産党指導部は、平和共存は各国人民の革命闘争が勝利をかちとる前提である、とみなしている。かれらは、各国人民のかちとった一連の勝利は、「社会制度の異なる国ぐにの平和共存の条件のもとでかちとられたものである」⑫とかがえていっている。かれらは、「ほかでもなく、社会制度の異なる国ぐにが平和的に共存している状況のもとで、キューバは社会主義革命を実行し、アルジェリア人民は民族独立を獲得し、四〇数カ国が民族独立をかちとり、各兄弟党が成長し強大になり、世界共産主義運動の影響がひろがっているのである」⑬とのべている。

(七) ソ連共産党指導部は、平和共存は「革命的な国際労働運動が基本的な階級的目的を達成

するのをたすけるもつともよい方法」^④であるともみなしている。かれらは、平和共存の状況のもとで、資本主義国家が社会主義へ平和的に移行する可能性が大きくなった、といっている。かれらはまた、社会主義が経済競争でおさめた勝利は、「資本主義関係全体にたいする壊滅的な打撃を意味するであろう」^⑤、「ソ連人民が共産主義の幸福を享受する時、世界ではさらに、いく億もの人びとが『われわれは共産主義に賛成である』というであろう」^⑥、その時には、資本家ですえ「態度を変えて共産党にはいつてくる」であろう、とかんがえている。

みていただきたい。ソ連共産党指導部のこれらの観点は、レーニンの平和共存政策と、いったいどういう共通点があるだろうか。

レーニンの平和共存政策は、社会主義国家が社会制度の異なる国々にとの関係処理する面での政策であるが、これに反して、フルシチョフは平和共存を現代の社会生活の最高原則である、といくるめているのである。

レーニンの平和共存政策は、権力をにぎっているプロレタリアートの国際政策の一つの面であるが、これに反して、フルシチョフは平和共存を社会主義国家の対外政策の総路線にまでおしひろげ、さらにそれを全世界のすべての共産党の総路線にまでおしひろげているのである。

レーニンの平和共存政策は帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対するものであるが、これに反して、フルシチョフの「平和共存」は帝国主義の必要に応じ、帝国主義の侵略政策と戦争政策を助長するものである。

レーニンの平和共存政策は、国際的な階級闘争の観点から出発したものであるが、これに反して、フルシチョフの「平和共存」は国際的な規模で、階級協力を階級闘争に取って代わらせているものである。

レーニンの平和共存政策は、国際プロレタリアートの歴史的使命から出発したものであり、したがって社会主義国家が平和共存政策を実行するとともに、すべての被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争をだんこととして支持しなければならぬ。これに反して、フルシチョフの「平和共存」は平和主義をプロレタリア世界革命に取って代わらせ、プロレタリア国際主義を裏切ったものである。

フルシチョフは平和共存政策を階級的降伏政策にかえてしまった。かれは平和共存に名をかりて、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則を裏切り、マルクス・レーニン主義の革命的なたましいを抜きとり、マルクス・レーニン主義を形をなさないまでに歪曲し、似ても似つかぬまでに書きかえたのである。

これはマルクス・レーニン主義にたいする露骨な裏切り行為である！

三つの原則的な意見の相違

ソ連共産党指導部とわれわれとのあいだの、すべてのマルクス・レーニン主義的政党およびマルクス・レーニン主義者とのあいだの平和共存問題での意見の相違は、社会主義国家が平和共存政策を実行する必要があるかどうかという相違ではなく、いったいどのようにレーニンの平和共存政策に正しく対処するかという原則的な相違である。これらの意見の相違は、おもにつきの三つの問題に集中している。

第一の問題——平和共存の実現をたたかいたるために、帝国主義やブルジョア反動派とたたかう必要があるかどうか。平和共存の実現は社会主義と帝国主義のあいだの対立と闘争をとりぞくことができるかどうか。

マルクス・レーニン主義者は一貫して、社会制度の異なる国々にのあいだで平和共存を実行することは、社会主義国家側からいえば、なんらの困難もないのであり、平和共存の障害は、これまですべて、帝国主義とブルジョア反動派からきていると考えてきた。

平和共存五原則は、帝国主義の侵略政策と戦争政策に対決して打ち出されたものである。平和共存五原則によると、国際関係のなかで、他国の領土と主権をおかすことはゆるされず、他国内政に干渉することはゆるされず、他国の利益と平等な地位をそこなうことはゆるされず、侵略戦争をひきおこすことはゆるされないのである。ところが、他国と他民族を侵略し奴隷化するのが、帝国主義の本性である。帝国主義が存在するかぎり、このような本性は絶対に変わることはないのである。それゆえ、帝国主義の本性についていえば、帝国主義はけつして平和共存五原則をうけいれることをのぞまないものである。いったん可能性がありさえすれば、帝国主義はいつも社会主義国家を破壊し、ひいてはそれを消滅しようとしており、他国と他民族を侵略し奴隷化しようとするのである。

歴史があきらかにしているように、いろいろの不利な客観的原因があるからこそ、帝国主義は社会主義国家にたいし、あえて戦争をひきおこす冒険ができなくなり、あるいは停戦をよぎなくされ、ある程度の平和共存に同意せざるをえなくなるのである。

歴史がまたあきらかにしているように、帝国主義国家と社会主義国家のあいだには、終始するどい、複雑な闘争が存在しており、時には直接的な軍事衝突や戦争さえおこるのである。第二次世界大戦で、たとえ熱い戦争がおきないという状況のもとでも、帝国主義は依然として冷たい戦争をすすめており、帝国主義国家と社会主義国家とは実際には冷たい戦争のなかで共存しているという状態にある。帝国主義国家は積極的に軍備を拡張し、戦争を準備するとともに、いつも百

方手をつくして、政治、経済、イデオロギーなどの分野で社会主義国家に反対し、さらには軍事的挑発や戦争によるおどしさえやっているのである。帝国主義が社会主義国家にたいして冷たい戦争をすすめる、社会主義国家はこうした冷たい戦争に反対してたたかっているが、これは国際的な規模の階級闘争のあらわれである。

帝国主義は社会主義国家にたいしてだけでなく、全世界のいたるところでかれらの侵略計画と戦争計画をおすすめる、被抑圧人民と被抑圧民族の革命運動を弾圧しているのである。

このような状況のもとで、社会主義国家は、全世界の各国人民とともに、帝国主義の侵略政策と戦争政策にだんこ反対し、帝国主義とまっとうから対決してたたかわなければならぬ。こうした階級闘争は、ときにははげしくなり、ときにはゆるやかになるが、さけられないものである。

ところが、フルシチョフはこれらの動かすことのできない事実を無視して、帝国主義がすでに平和共存の必要性をみとめたといわずに宣伝し、社会主義国家と全世界人民の反帝闘争を、平和共存政策とあいられないものであるとみなしている。

フルシチョフからみれば、帝国主義とブルジョア反動派が社会主義国家にたいし軍事的脅威をあたえ、武力攻撃をおこなっている時、あるいは社会主義国家の主権と尊厳をそこなう屈辱的な

要求をだした時でさえ、社会主義国家はやはりどこまでも譲歩し、どこまでも相手との折り合いをつけるほかはないのである。

ほかでもなくこのような論理にしたがって、フルシチョフは、自分がカリブ海の危機にさいして、一步一步と譲歩し、原則をもって取り引きをおこない、アメリカ帝国主義の屈辱的な要求をかしこまっとうけいれたことを、「平和共存の勝利」と称しているのである。

ほかでもなくこのような論理にしたがって、フルシチョフは、中印境界問題で中国の堅持している正しい原則を、また、中国がもはや忍耐できなくなった状況のもとでインド反動派の武力攻撃にたいし自衛のための反撃にでたことを、「平和共存を破壊した」と称しているのである。

フルシチョフもあるばあいには、二つの異なる社会制度のあいだの闘争を口にするが、かれはこの闘争をどうみているだろうか。

フルシチョフは、「二つの制度のあいだのさけられない闘争をもつばら二つのイデオロギーのあいだの闘争にかえるよう努力しなければならぬ」^⑩とのべている。

ここでは、政治闘争がなくなっている。

フルシチョフはまた、「レーニンの社会経済構造と政治構造の異なる国ぐいの平和共存原則は、たんに戦争がないということだけを意味しているのでなく、一時的な、不安定な停戦状態で

ないことを意味している。それは、これら諸国のあいだに友好的な経済・政治関係をたもつことを前提とし、いろいろな形の平和的国際協力の樹立と発展を規定している」^⑧とのべている。

ここでは、どんな闘争もなくなった。

フルシチョフは手品師のように、手をかえ品をかえて、大きいことを小さくし、小さいことはきえてなくさせ、社会主義制度と資本主義制度の根本的な対立を抹殺し、社会主義陣営と帝国主義陣営の根本的な矛盾を抹殺し、国際的な規模の階級闘争を抹殺し、二つの制度、二つの陣営のあいだの平和共存を「全面的協力」にかえてしまったのである。

第二の問題——平和共存は社会主義国家の対外政策の総路線とすることができるかどうか。

社会主義国家の対外政策の総路線は、社会主義国家の対外政策のもつとも根本的な原則を體現していなければならず、社会主義国家の対外政策のもつとも基本的な内容をふくんでいなければならぬ、とわれわれはかんがえる。

社会主義国家の対外政策のもつとも根本的な原則はなにか。それはつまりプロレタリア国際主義の原則である。

レーニンは、「先進国の革命家およびすべての被抑圧民族と同盟をむすんで、すべての帝国主

義者に反対すること、これがプロレタリアートの対外政策である」とのべている。（「ロシア革命の対外政策」。『レーニン全集』第二五巻）レーニンの提起したこのプロレタリア国際主義の原則は、社会主義国家の対外政策の指針とならなければならないのである。

社会主義陣営が形づくられてから、すべての社会主義国家の対外政策は、つぎのような三面の関係を処理しなければならない。つまり、他の社会主義国家との関係、社会制度の異なる国家との関係、被抑圧人民および被抑圧民族との関係である。

したがって、われわれからみれば、社会主義国家の対外政策の総路線には、つぎのような内容がふくまれていなければならない。すなわち、プロレタリア国際主義の原則のもとで、社会主義陣営諸国のあいだの友好・相互援助・協力の関係を発展させること。五原則を基礎として、社会制度の異なる国ぐにとの平和共存をたたかいたり、帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対すること。あらゆる被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を支援すること。この三つの内容は互いにつながっていて、どれも欠くことのできないものである。

ソ連共産党指導部は社会主義国家の対外政策の総路線を一面的に平和共存にしばっているが、ここでわれわれは、つぎのことを問いただしたい。社会主義国家は他の社会主義国家との関係をどう処理すべきか。社会主義国家のあいだにはたんに平和共存の関係があるだけなのか、と。

もちろん、社会主義国家のあいだにも、互いに五原則をまもらなければならず、兄弟国の領土保全を破壊したり、兄弟国の独立、主権をおかしたり、兄弟国の内政に干渉したり、兄弟国の内部で転覆活動をおこなったり、兄弟国のあいだの関係で平等互恵の原則に違反したりすることは絶対にゆるされないものである。しかし、たんにこれらの原則を実行しただけではまだまだ足りない。一九五七年の宣言は、「これらの原則はひじょうに重要なものであるが、社会主義諸国間の相互関係の本質を全部ふくんでいるわけではない。兄弟的な相互援助は、社会主義諸国間の相互関係ときりはなせない一部分である。このような相互援助は、社会主義的国際主義の原則を力づくよく体現している」とのべている。

ソ連共産党指導部が平和共存を対外政策の総路線としているのは、実際には社会主義諸国間のプロレタリア国際主義の相互援助・協力の関係を解消し、社会主義の兄弟国を資本主義国と同様にとりあつかうことを意味しており、つまり、社会主義陣営の解消を意味している。

ソ連共産党指導部は社会主義国家の対外政策の総路線を一面的に平和共存にしばっているが、ここでわれわれはつぎのことを問いただしたい。社会主義国家は、あらゆる被抑圧人民と被抑圧民族との関係をどう処理すべきであるか。権力をにぎったプロレタリアートと、まだ解放をからとっていない階級的兄弟や、あらゆる被抑圧人民、被抑圧民族との関係は、相互援助の関係では

なく、たんなる平和共存の関係であるともいえるのだろうか。

十月革命ご、レーニンは、プロレタリアート独裁をうちたてた社会主義国家はプロレタリア世界革命を推進する根拠地である、と一度ならず指摘した。スターリンもつぎのようにのべたことがある。「一国で勝利をおさめた革命は、自分を独立した自由自在なものとするべきではなく、世界各国のプロレタリアートの勝利をはやめるための援助、手段とみなさなければならぬ。」「それは世界革命をさらに発展させる強力な基地である。」（「十月革命とロシア共産主義者の戦術」。『スターリン全集』第六巻）

したがって、社会主義国家の対外政策は、社会主義国家と社会制度の異なる国家との関係を処理するだけでなく、社会主義国家と社会主義国家との関係を正しく処理し、社会主義国家と被抑圧人民および被抑圧民族との関係をも正しく処理しなければならない。社会主義国家は、被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争にたいする支援を、自分の国際主義的義務とし、対外政策の重要な内容としなければならない。

レーニンやスターリンとは反対に、フルシチョフは平和共存を社会主義国家の対外政策の総路線としているが、これはつまり、対外政策のなから、被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を支援するというプロレタリア国際主義の任務を排除してしまつたものである。これはけつして平和

共存政策の「創造的發展」などというものではなくて、「平和共存」を口実にして、プロレタリア国際主義を裏切ったものである。

第三の問題——社会主義国家の平和共存政策は、全世界のすべての共産党と国際共産主義運動の総路線とすることができるかどうか。各国人民の革命に取って代わることができるかどうか。

われわれは、平和共存は社会制度の異なる国々にのあいだの関係をさし、独立した主権国家のあいだの関係をさしているもの、とかんがえている。プロレタリアートは革命の勝利をかちとつたのちに、はじめて平和共存政策を実行する必要性とその可能性があるのである。すべての被抑圧人民と被抑圧民族についていえば、かれらの任務は、帝国主義とその手先の支配をくつがえし、自らの解放をたたかいたることであつて、帝国主義やその手先と平和共存を実行すべきでなく、またそれは不可能でもある。

それゆえ、平和共存を被抑圧階級と抑圧階級、被抑圧民族と抑圧民族との関係にまでおしひろげ、社会主義国家の平和共存政策を、資本主義世界の共産党と革命的人民の政策にまでおしひろげ、あるいは被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を、社会主義国家の平和共存政策に服従させようとすることはすべて誤りである。

われわれは一貫してつぎのように考えてきた。つまり、社会主義国家がレーニンの平和共存政策を正しく遂行することは、社会主義国家の力を發展させるのに有利であり、帝国主義の侵略政策と戦争政策をバクロするのに有利であり、帝国主義に反対するすべての人民と国々にを團結させるのに有利であり、したがつてまた、帝国主義とその手先に反対する各国人民のたたかいかにも有利である。これと同時に、帝国主義とその手先に反対する各国人民の革命闘争は、侵略勢力や戦争勢力、反動勢力に直接打撃をあたえ、それをよわめており、世界の平和事業と人類の進歩事業にとつて有利であり、したがつてまた、社会主義国家が社会主義制度の異なる国々にとの平和共存の実現をたたかいたるのに有利である。それゆえ、社会主義国家がレーニンの平和共存政策を正しく遂行することは、各国人民の革命闘争の利益と一致するものである。

しかし、社会主義国家が社会制度の異なる国々にとの平和共存をたたかいたること、各国人民の革命とはまったくちがつた二つの問題である。

ソ連共産党中央委員会にあてた中国共産党中央委員会の六月十日づけ返書は、つぎのように指摘している。「社会制度の異なる国々にのあいだで平和共存を実行すること、これは一つのことからである。平和共存は、共存している相手国の社会制度に指一本もふれることは根本的にゆるされず、また、それはまったく不可能なことでもある。ところで、各国の階級闘争、民族解放闘争、資本主義から社会主義への移行、これはまた別のことがらである。これらの闘争はみな、社

会制度を變革するためのはげしい、食うか食われるかの革命闘争である。平和共存は各国人民の革命闘争に取って代わることが絶対にできない。いかなる国も、資本主義から社会主義への移行は、自国のプロレタリア革命とプロレタリアート独裁をつうずるほかはないのである」

階級社会で、平和共存を「社会の直面しているもつとも主要な問題を解決するのに、もつともよい、唯一の実行可能な道」であるとみなし、平和共存を「現代の社会生活全体の基本的な法則」であるのみならず、階級闘争を否定するまったくあやまった社会平和主義であり、マルクス・レーニン主義にたいするあきらかな裏切りである。

はやくも一九四六年に、毛沢東同志は性質のちがったこの二つの問題を区別するとともに、つぎのことをはつきりと指摘した。ソ連がアメリカ、イギリス、フランスと、若干の問題でおこなった妥協は、「けつして資本主義世界の各国人民に、これにならつて国内でも妥協せよと要求するものではない。各国の人民はやはり、異なつた状況に應じた異なつた闘争をおこなうであらう。」（「当面の国際情勢についてのいくつかの評価」。『毛沢東選集』第四巻）

これはマルクス・レーニン主義的な正しい方針である。ほかでもなく毛沢東同志のこの正しい方針にみちびかれて、中国人民は決然として革命を最後までおこない、中国革命の偉大な勝利をかちとつたのである。

このマルクス・レーニン主義的な方針とは反対に、ソ連共産党指導部は、すでに権力をにぎつたプロレタリアートが社会制度の異なる国々にとの関係を処理する面での政策を全世界のすべての共産党の総路線と混同させており、前者をもつて後者におきかえ、各国の共産党と革命的人民をすべてソ連共産党指導部のいわゆる「平和共存」の総路線にしたがわせようとする。かれらは自分で革命をやらす、他人にも革命をやらせまいとし、また自分で帝国主義に反対せず、他人にも帝国主義に反対させまいとしているのである。

この点について、ソ連共産党中央委員会の公開書簡とフルシチョフが最近おこなつたいくつかの演説は、なんとかしてこれを否定しようとしておこなつている。かれらは、ソ連共産党指導部が平和共存を被抑圧階級と抑圧階級、被抑圧民族と抑圧民族の関係にまでおしひろげていると非難するのは、「実におどろくべき誹謗」であるといつている。かれらはさらに、平和共存は「資本主義国家の内部で資本家とおこなつている階級闘争や民解放運動には適用できない」とさえ、いかにももつたいぶつていつている。

しかし、このようないのがれはなんの役にもたないものである。

われわれはソ連共産党指導部につきのことを問いただしたい。平和共存政策がたんに社会主義国家の対外政策の一つの面にすぎないのに、なぜきみたちは最近にいたつてもなお、平和共存政

策が「世界的な規模で資本主義から社会主義へ移行する全期間の戦略的路線」^⑩である、といっているのか。きみたちはすべての資本主義国の共産党と被抑圧民族の共産党に、平和共存をその総路線にさせようとしているが、これはきみたちの「平和共存」政策を、各国共産党の革命的路線におきかえ、平和共存政策をほしのままに、被抑圧階級と抑圧階級、被抑圧民族と抑圧民族の關係にまでおしひろげようとするものではないだろうか。

われわれはまた、ソ連共産党指導部につきのことを問いただしたい。各国人民の革命の勝利は、主として自分の闘争にたよつてのみ、はじめておさめることができるのに、どうしてこれらの勝利が平和共存を前提としているとか、あるいは平和共存の結果であるとか、いいくるめることができるのだろうか。きみたちのこのような論法は、各国人民の革命闘争をきみたちのいわゆる平和共存政策に従属させようとするものではないだろうか。

われわれはまた、ソ連共産党指導部につきのことを問いただしたい。社会主義国家の経済的成果と経済競争でおさめた勝利は、うたがいもなく被抑圧人民と被抑圧民族に手本と励ましの役割をはたしている。だが、どうして、各国人民の革命闘争を通じてではなく、平和共存、平和競争を通じて、社会主義が全世界で勝利することができる、といえるのだろうか。

ソ連共産党指導部は、平和共存と平和競争にたよりさえすれば、資本主義関係全体に「壊滅的な打撃」をあたえることができ、全世界で社会主義への平和的移行を実現することができる、と吹聴している。實際上、これはつぎのように考えていることにほかならない。つまり、あらゆる被抑圧人民と被抑圧民族が、闘争をおこなう必要などはまったくないし、たちあがつて革命をおこなう必要などもまったくないし、また帝国主義、植民地主義とその手先の反動的支配をくつがえす必要などもまったくない、ソ連の生産水準と生活水準がもつとも発達した資本主義国家を追いこすのを静かにまっつておりさえすれば、全世界のすべての抑圧され搾取されている奴隷はいはみな、抑圧者、搾取者といっしょに、共産主義にはいることができる。これこそまぎれもなく、ソ連共産党指導部が、各国人民の革命闘争をいわゆる「平和共存」におきかえ、各国人民の革命闘争を解消するものではないだろうか。

上にのべた三つの問題についての分析から、人びとは、われわれとソ連共産党指導部との意見の相違は、重大な原則的な相違であるということをはつきりみてとることができる。このような意見の相違の本質は、つぎのようなものである。つまり、われわれの平和共存政策はレーニン主義的であり、プロレタリア国際主義の原則を基礎にしており、帝国主義反対と世界平和擁護の事業に有利であり、全世界の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争の利益に合致するものである。だが、ソ連共産党指導部のいわゆる「平和共存」の総路線は反レーニン主義的であり、プロレタリ

ア国際主義の原則を放棄したものであり、帝国主義反対と世界平和擁護の事業に有害であり、全世界の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争の利益にそむくものである。

ソ連共産党指導部の「平和共存」の総路線は

アメリカ帝国主義の要求にこたえたものである

ソ連共産党指導部の「平和共存」の総路線は、すべてのマルクス・レーニン主義的政党と各国の革命的人民からだんこととして拒否されたが、帝国主義からは熱烈な称賛をうけている。

西側独占ブルジョアジーの代弁者は、かれらがソ連共産党指導部のいわゆる「平和共存」の総路線が気に入っていることを少しもかくそうとしていない。かれらはフルシチョフを「モスクワにおける西側のもっともよい友人」^②であるとし、^②「ソ連首相ニキタ・フルシチョフの行動はアメリカの政治家のようである」^②と語った。かれらは、「自由世界からいえば、フルシチョフ同志はロシア人のもっともよい首相であるとみなされている。かれはほんとうに平和共存を信じている」^②とのべた。かれらは公然と、「ソ米関係を改善するという可能性は、アメリカ国務省のいちぶの人たちに、アメリカはある限度内でフルシチョフの任務に便宜をあたえるべきだと感じさせている」^②と表明した。

帝国主義はこれまで一貫して社会主義国家の平和共存政策を敵視しており、「共存ということはおそろしいものでもあれば、にくむべきものでもある」とか、「われわれは、このような一時的な、不自然な共存の考えをゴミ箱にすてよう」^②とかわめきたてている。かれらはなぜいまになって、フルシチョフの「平和共存」の総路線にこのように大きな興味を感じているのだろうか。その理由は、フルシチョフの「平和共存」の総路線が帝国主義にとって有利であることを帝国主義がみてとつたからである。

各国人民の革命を撲滅し、社会主義陣営を消滅し、全世界を制覇するという戦略的目標を実現させるため、アメリカ帝国主義はゆらい戦争と平和の二面的戦術をとってきた。国際情勢がますますアメリカにとって不利に発展しつつある状況のもとでは、アメリカ帝国主義はひきつづき軍備を拡張し、戦争を準備するとともに、いっそう多くの平和の陰謀をもてあそぶことが必要になつている。

はやくも一九五八年に、ダレスは、アメリカは全力をあげて「平和な手段で勝利をかちとる」という「高尚な戦略」^⑤を遂行しなければならない、と指摘した。

ケネディは政権の座についてから、ダレスのこの「平和戦略」をうけつづき、発展させ、「平和共存」をさかんに口にしてきた。かれは、「われわれは水爆よりはるかにすぐれた兵器が必要で

ある……このようないつそうすぐれた兵器とは、つまり平和的協力である」⑧とのべた。

これは、アメリカ帝国主義がほんとうに平和共存をうけいれることをのぞんでいるとでもいうのだろうか。ソ連共産党指導部のことををかりれば、「平和共存の賢明さと現実性」をみとめたとしてもいふのだろうか。もちろん、そうではない。

まじめに分析しさえすればだれでも、アメリカ帝国主義のいつている「平和共存」のもつ真の意味と目的をたやすくみいだすことができる。

その真の意味と目的とはなにか。

第一に、アメリカ帝国主義は、いわゆる「平和共存」によって、なんとかして、ソ連と社会主義諸国の手足をしばりあげ、かれらが資本主義世界の各国人民の革命闘争を支持するのを許さないようにしようとしている。

ダレスはかつて、「ソ連政府についていえば、もしソ連政府が国際共産主義のさだめた方向からぬげだし、おもしろシアの国家と人民の福祉をはかるなら、ソ連政府は『冷たい戦争』を終わらせることができるだろう。同様に、もし国際共産主義が全世界におけるその目標を放棄するなら……『冷たい戦争』は終わるであろう」⑨とのべたことがある。

ケネディはかつて、米ソ関係を改善しようとするなら、ソ連は「全世界を共産主義化する」計

画を放棄しなければならぬし、「自国の利益だけを考え、自国の人民が平和の条件のもとで幸福な生活をおくることだけを考え」⑩なければならぬ、といったことがある。

ラスクはもつと露骨にいつている。かれは、「共産党の指導者とその世界革命の目標を放棄するまでは、保障された恒久平和をうることは不可能である」といつた。かれはまた、ソ連の指導者は「かれらが世界共産主義運動にたいして負っている義務やかれらに課せられた負担と危険にたいし反感をもっている」という形跡があるとのべた。ラスクはさらに公然と、ソ連の指導者に、「共産主義が全世界で勝利するという幻想をすてて、そこからひきつづき前進する」⑪よう、とさえ要求している。

これらのことばの意味はどはつきりしたものはない。アメリカ帝国主義は、資本主義世界の被抑圧人民と被抑圧民族が自己の解放をめざしておこなっている革命闘争を、社会主義国家のおしすすめている「全世界共産主義化」の結果である、といいくるめている。かれらはソ連の指導者にむかって、あなたがたはアメリカとの平和共存をのぞんでいるのか。よろしい！ そのための条件は、あなたがたが資本主義世界の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を絶対に支持してはならないし、また責任をもつて、これら諸国の人民が革命にたちあがらないようにすることである。このようにすれば、アメリカ帝国主義の胸算用どおりに、かれらが大大的に資本主義世界各

国の革命運動をおしつぶし、世界人口の三分の二をしめる人民をことごとくアメリカ帝国主義の隷属と支配のもとにおくのに都合がよくるのである。

第二に、アメリカ帝国主義は、いわゆる「平和共存」の名のもとに、ソ連と社会主義諸国にたいし「平和的進化」政策をおしすすめ、なんとかして資本主義制度を復活させようとしてとめていられるのである」⑩とか、「守勢に立つだけでは不十分である。自由は浸透できる積極的な力とならなければならない」⑪とか、「われわれは、ソ連世界内部の進化を激励したい」⑫などと語ったことがある。

アイゼンハワーは、アメリカは全力をあげて「平和手段」をもちいて、「独裁の暴政に束縛されている人民に、最後に自分たちの運命を自由表決によって決定する権利を享受できるようにさせるであろう」⑬といったことがある。

ケネディは、「われわれの任務は」、「われわれの全力をつくして」「いまソビエト帝国と各大陸でおきている変化が、もつと多くの人びとにさらに多くの自由をもたらし、世界平和をもたらすことができるようにすることである」⑭とのべたことがある。ケネディはまた、東欧の社会主義諸国にたいし、「辛抱よく自由を激励し、暴政をおさえる政策を慎重に遂行し」、そうす

ることによってこれら諸国の人民にいわゆる「自由な選択」⑮の機会をあたえると宣言した。

これらのことばもまたひじょうにはつきりしている。アメリカ帝国主義は、社会主義制度を「独裁」だの、「暴政」だのと中傷し、資本主義の復活を「自由な選択」といにくるめていられる。かれらはソ連の指導者にむかって、あなたがたはアメリカとの平和共存をのぞんでいるのか？ よろしい！と。しかし、これはけっしてアメリカが社会主義国家の現状をみとめていることを意味しているのではない。それとは反対に、社会主義国家は資本主義制度を復活しなければならぬ、と語っているのである。いいかえれば、世界人口の三分の一をしめる人民が社会主義の道をすすむことに、アメリカ帝国主義はけっして甘んじないのであり、いつもすべての社会主義国家を消滅しようと夢みているのである。

要するに、アメリカ帝国主義のいわゆる「平和共存」のもつ意味は、帝国主義の隷属と支配をうけているすべての人民に解放をかちとることをゆるさず、すでに解放されたすべての人民は、ふたたび帝国主義の隷属と支配をうけなければならないはず、全世界はアメリカのいわゆる「自由世界共同体」のなかに統合されなければならないということである。

人びとは、ソ連共産党指導部の「平和共存」の総路線は、ほかでもなく、アメリカ帝国主義の好みにむいているということを容易にみてとることができる。

ソ連共産党指導部は「平和共存」を口実にして、極力アメリカ帝国主義のきげんをとり、アメリカ帝国主義の代表的人物が「平和に関心をよせている」とたえず宣伝しているが、これこそ、アメリカ帝国主義の平和の欺瞞政策の要求にこたえたものである。

ソ連共産党指導部は「平和共存」を口実にして、平和共存を被抑圧階級と抑圧階級、被抑圧民族と抑圧民族との関係にまでおしひろげて、革命に反対し、革命を解消している。これこそ、社会主義国家が資本主義世界の各国人民の革命を支持するのを許さないというアメリカ帝国主義の要求にこたえたものである。

ソ連共産党指導部は「平和共存」を口実にして、国際的な規模で階級協調を階級闘争に取って代わらせ、社会主義と帝国主義との「全面的協力」を大いに宣伝し、帝国主義の社会主義国家にたいする浸透に大いに便宜をあたえている。これこそ、アメリカ帝国主義の「平和的進化」政策の要求にこたえたものである。

帝国主義はゆらい、もつとも良い逆の面の教師である。ここでわれわれは、ダレスがソ連共産党第二十回大会後に語った二節のことを書きしるしておこう。

ダレスはつぎのようにのべた。「ソ連内部には自由主義を要求する比較的大きな勢力があると
いう形跡がある」。もしこのような勢力がソ連内部でひきつづき発展し、そのいきおいが日ま

しに大きくなれば、わたしがかつていったように、十年あるいは一代のあいだに、われわれの政策の偉大な目標が達せられることが考えられるし、またそれを期待する理由もある。われわれの政策の偉大な目標が達せられるということは、ロシア人民の願いを反映し、全世界支配の略奪的な野心を放棄するとともに文明国家の原則と国際連合憲章に具現されている原則にのっとりて行動する人びとに支配されるようなロシアが出現することである」^③

ダレスはまた、「長い将来の見通し、実際は長い将来の必然性と言いたいのだが、それは、ソ連の支配者の現在の政策が進化するだろうということである。このことによつて、かれらの民族主義的な要素がふえ、国際主義的な要素はへるであろう」^④といった。

みたところ、ダレスの幽霊はマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を裏切った人びとにつきまとい、そのため、かれらはいわゆる「平和共存」の総路線にすっかりとりつかれ、自分たちのやっていることがどんなにアメリカ帝国主義の希望にかなっているかということをもまったくかんがえてみようともしないのである。

ソ米協力はソ連共産党指導部の「平和共存」の総路線のたましいである

ソ連共産党指導部はここ数年らい、口ぐせのように、「平和共存」、「平和共存」といって

るが、実際に、中国とその他いぢぶの社会主義国家にたいするかれらの態度は、プロレタリア國際主義の原則に違反しているばかりでなく、平和共存五原則にも合致していない。ソ連共産党指導部が平和共存をかれらの対外政策の総路線であるとたえず宣伝しているのは、あばいていえば、すべての社会主義国家、全世界のすべての共産党を、かれらがここ数年らい夢のなかでさえもさがしもとめてきたソ米協力で服従させようとしていることである。

ソ連とアメリカが協力して世界で支配をふるうこと、これがソ連共産党指導部の「平和共存」の総路線のたましいである。

かれらの奇妙な言論をみていただきたい。

「現代の二つのもつとも偉大な強国——ソ連とアメリカは、全世界のどの国をもはるか後方にひきはなしている」^⑧

「この二つの国はどの一つも、多数の国ぐにをひきいている。ソ連は世界社会主義体制をひきい、アメリカは資本主義陣営をひきいている」^⑨

ソ連とアメリカは「ともに世界でもつとも強大な国である。もしわれわれが平和のために連合するならば、戦争はおこらないであろう。その時、もしある気違いが戦争をひきおこそうとするなら、われわれがちよつとゆびさまでおどしただけで、この気違いをおとなしくさせることができ

きる」^⑩

「ソ連政府首脳エヌ・エス・フルシチョフとアメリカ大統領ジョン・ケネディのあいだで協定が達成されれば、人類の運命を左右する國際問題も解決されるであろう」^⑪

われわれはソ連共産党指導部に問いただしたい。アメリカ帝国主義は世界人民のもつとも凶悪な敵であり、侵略と戦争のおもな勢力である。このことは一九五七年の宣言と一九六〇年の声明にきわめてはつきりと書かれている。きみたちは世界平和のおもな敵と「連合して」平和を保障することができるのであろうか。

われわれはソ連共産党指導部に問いただしたい。世界には一〇〇余の国があり、三〇数億の人口がある。これらの国と人民は自分の運命を決定する権利がなく、ただおとなしくソ連、アメリカという二人の「巨人」、二つの「もつとも偉大な強国」のいいなり次第にならなければならぬといふのだから、きみたちのこのような思いがあつたでたらめな言論は、まったくの大国排外主義であり、まったくの強権政治ではないか。

われわれはまた、ソ連共産党指導部に問いただしたい。きみたちは、ソ米両国のあいだで、協定が達成され、二人の「大人物」のあいだで話し合いがまとまりさえすれば、人類の運命をきめることができ、すべての國際問題を解決することができる、ほんとうにおもっているのか。き

みたちはまちがつている。まったくまちがつている。昔からいままで、そのようなことはなかったし、二〇世紀六〇年代においては、なおさらそのようなことはありえない。現在、世界にはひじょうに複雑な矛盾が存在しており、社会主義陣営と帝国主義陣営との矛盾があり、資本主義国家内部のプロレタリアートとブルジョアジーとの矛盾があり、被抑圧民族と帝国主義との矛盾があり、帝国主義間の矛盾があり、帝国主義独占資本グループ間の矛盾がある。ソ米両国で協定が達成されれば、これらの矛盾がなくなるとでもいうのであろうか。

ソ連共産党指導部の眼中には、アメリカ一国しかおいていない。ソ米協力を追求するため、ソ連共産党指導部は惜しみもなく、ソ連人民の真の同盟者を裏切り、いまなお帝国主義・資本主義制度のもとにある階級的兄弟およびすべての被抑圧人民と被抑圧民族を裏切っている。

ソ連共産党指導部は、社会主義陣営をやつきになって破壊している。かれらはデマ、誹謗のかぎりをつくして、中国共産党を攻撃し、中国にたいして政治的、経済的圧力をくわえている。社会主義のアルバニアにたいしては、これをつぶしてしまわなければ気がすまないという態度をとっている。かれらはアメリカ帝国主義とグルになって、革命的なキューバに圧力をくわえ、キューバに自国の主権と尊厳を犠牲にさせようとしたのである。

ソ連共産党指導部は、帝国主義とその手先に反対する各国人民の革命闘争をやつきになって破

壊している。かれらは社会改良主義の宣教師の役柄を演じ、各国のプロレタリアートとその政党の革命的闘志をきりくずそうとしている。かれらは帝国主義の要求にこたえて、民族解放運動を破壊し、ますます露骨にアメリカ新植民地主義の弁護人になりさがっているのである。

ソ連共産党指導部はソ米協力を追求するために、これほど大きく力コブをいれ、これほど巨大な代価をはらったが、かれらはいったいアメリカ帝国主義からなにを手にいれたのだろうか。

一九五九年いらい、フルシチョフはソ米両国首脳の会谈にとりつかれてきた。かれはこの問題でどれだけ甘い夢をみ、どれだけ幻想をまきちらしたかわからない。かれは、アイゼンハワーが「大政策をわきまえている」「大人物」^④であると熱烈にほめたたえ、ケネディが「この二つの強大な国家の政府がになっている重大な責任を理解している」^⑤と熱烈にほめたたえた。ソ連共産党指導部は、「キャンプ・デービッド精神」なるものをさかんに宣伝し、ウィーン会谈が「歴史の意義をもつ事件」であるときかんに宣伝した。ソ連の新聞と出版物は、ソ米両国の首脳がとなりあつてすわると、人類の歴史は「新しい転換点」にはいるとか、このふたりの「大人物」が握手さえすれば、国際関係に「新紀元」があらわれるとか吹聴している。

ところが、アメリカ帝国主義はソ連共産党指導部をどのようにあしらったか。キャンプ・デービッド会谈がおこなわれてから一カ月あまりののち、アイゼンハワーは公然と、「わたしはキャ

ンプ・デービッド精神というものがあるということを知らない」と言明した。キャンプ・デービッド会談七カ月あまりののち、アイゼンハワーはU2型スパイ飛行機を派遣してソ連を侵犯させ、四カ国政府首脳会議を破壊した。ウイーン会談後まもなく、ケネディは、ソ米両国の今後二〇年間の平和についての思いあがった条件を公然ともち出した。それはつまり、ソ連は各国人民の革命闘争を支持してはならないし、東欧の社会主義国は資本主義制度を復活しなければならぬということであった。ウイーン会談の一年あまりののち、ケネディは、キューバにたいする海賊式の軍事的封鎖を指令し、カリブ海の危機をつくりだしたのである。

「上ハ碧落ヲ窮メ、下ハ黄泉、両処茫々トシテ皆見エズ」(訳者注「白居易の「長恨歌」中の一句。上は天空のはてまで、下はよみの国まで、くまなくさがしたが、どちらも茫々とかきりないひろがりがあるだけで、求める人はいつこ見つかからない、という意味)一時さわがれた「キャンプ・デービッド精神」とか、「人類の歴史の転換点」とか、「国際関係の新紀元」等々は、いまいったいどこにあるのか。

三國部分的核実験停止条約が調印されてから、ソ連共産党指導部はこんどは、「モスクワ精神」なるものをやつきになって宣伝している。かれらは、「鉄はあついうちにうたねばならない」とか、ソ米両国が一步つっこんだ協定に達する「有利な条件がととのつた」とか、「ゆつくりや

れ」、「あわてるな」などという態度をとるべきではない④、とかいつている。

「モスクワ精神」とはいったいなんのことなのか。われわれは最近におこったいくつかの事がらをみてみよう。

ソ連共産党指導部は「ソ米協力」のふんい気をさらにつくりだすために、モスクワでソ米国交樹立三〇周年祝賀集会をひらき、また、記念行事に参加するため、文化代表団をアメリカへ派遣した。だが、ソ連共産党指導部はこのような「熱意」をみせて、なにをえたか。アメリカのソ連駐在大使館の全館員はモスクワの祝賀集会に出席するのを拒否し、アメリカ国務省は特別覚え書をだして、アメリカの民衆にソ連文化代表団を бойкот するよう要求し、かれらは「もつとも危険で、うたがわしい人物」であると非難した。

ソ連共産党指導部が「ソ米協力」などときかんに宣伝していた時、アメリカはかえってバーグホーンというスパイをソ連へ派遣して活動をおこなわせた。ソ連政府がこのスパイを逮捕したのは、もともとまったく正当なことである。ところが、ケネディが、米ソ間の小麦の取り引きは「両国の情理にかなったふんい気にはたよらねばならず」、「このようなふんい気は、バーグホーンが逮捕されたことよってひどく破壊されてしまった」とわめきたてたのち、ソ連政府は「バーグホーンの運命にたいするアメリカ高官の心づかい」を理由に、「とりしらべの結果、反ソスパ

イ活動をおこなったことが明らかになった」と発表されたアメリカのスパイを裁判にもかけず、大急ぎで釈放したのである。

これらすべてを「モスクワ精神」とでもいうのか。もしこれを「モスクワ精神」とよぶなら、それはまったく悲しむべきことである。

モスクワ、最初の社会主義国家の首都のこの輝かしい名前、偉大な十月革命らしい、全世界のいく干、いく百万の人びとにあおがれてきたこの輝かしい名前は、こんにち、こともあろうに、ソ連共産党指導部によって、アメリカ帝国主義と結託したみにくい活動をおおいかくすために、この上もない恥辱をこうむっているのである。

要するに、アメリカ帝国主義に「友情」と「信頼」を乞い求めるために、ソ連共産党指導部がアメリカにどれだけのお世辞をつかい、どれほどお情けを求めたかわからない。また兄弟国と兄弟党に、どれほどかんしゃくを起こし、どんなに圧力をかけたかわからない。さらにまた、各国の革命的人民にたいして、どれだけの小手先をつかつて、どれだけの欺瞞をやったかわからない。だが、散る花には心があれども、ながれる水は無情である。かれらがアメリカ帝国主義からえたものは、ただ屈辱だけである。

ソ連共産党指導部に二言三言勧告する

偉大なソ連人民は、レーニンとスターリンの指導のもとに、帝国主義の武力干渉に反撃をくわえていたきびしい日々、また祖国防衛戦争のもえさかる烈火のなかで、困難のまえに頭をさげ、敵のまえにひざまずいたことがあつたらうか。現在、全世界はすばらしい革命的情勢をむかえており、社会主義はこれまでになく強大になり、帝国主義はこれまでになく困難にあつている。ところが、レーニンの創立した最初の社会主義国家がこともあろうに、アメリカ帝国主義によってこんなにまで侮辱され、社会主義陣営の荣誉がこともあろうに、ソ連共産党指導部によってこんなにまでふみにじられたのである。われわれと、全世界のすべてのマルクス・レーニン主義者、全世界のすべての革命的人民とが、どうしてこの上もなく心を痛めずにはおられようか。

ここで、われわれは誠意をこめてソ連共産党指導部に二言三言勧告する。

アメリカはもつとも凶悪な帝国主義国家であり、アメリカ帝国主義の戦略目標は、全世界を征服しようとして夢みているのである。アメリカ帝国主義は気違いのように各国の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争を弾圧し、公然と東欧をふたたびいわたる「自由世界の共同体」にもどらせると

放言している。全世界を征服しようとするアメリカ帝国主義の侵略計画のもつとも手痛い打撃はただ他人の頭上にくわえられるだけで、ソ連の頭上にはくわえられないだろうと、きみたちはどうして考えることができるのだろうか。

アメリカは帝国主義国家であり、ソ連は社会主義国家であつて、社会制度が根本的に対立しているこの二つの国家が、「全面的協力」を実現できると、きみたちはどうして考えることができるのだろうか。

アメリカは他の帝国主義大国とのあいだでさえ、互いにだましあい、いがみあつており、かならず相手を自分の足でふみつけずにはおかないと思つてゐるのに、きみたちは、帝国主義のアメリカが社会主義のソ連と仲よくやつていけると、どうして考えることができるのだろうか。

ソ連共産党指導部の同志のみなさん、ひとたび世界にあらしがまきおこつた時、アメリカ帝国主義がたよりになるかどうかを冷静に考へてもらいたい。いや、アメリカ帝国主義はたよりにならないし、どの帝国主義と反動派もみなたよりにならないのである。ソ連のほんとうにたよりになる同盟者は、社会主義陣営の兄弟国だけであり、マルクス・レーニン主義の兄弟党だけであり、各国の被抑圧人民と被抑圧民族だけである。

人類の歴史の発展法則は、いかなる人の意志によつても左右されないものである。社会主義陣

営の存在と発展、全世界の被抑圧人民と被抑圧民族の革命運動の発展は、いかなる人によつてもおしつぶされないものであり、阻止されないものである。社会主義陣営諸国の人民を裏切り、全世界の人民を裏切り、アメリカ帝国主義とグルになつて世界で采配をふるおうと夢みる人はだれでも、最後にはけつしてよい目にあわないのである。ソ連共産党指導部がこのようなことをするとは、このうえもない大きな誤りであり、このうえもない危険である。

がけつふちで手綱をひきしめ馬をとめれば、まだおそくはない。いまこそ、ソ連共産党指導部がいわゆる「平和共存」の総路線を放棄し、レーニンの平和共存政策の道にもどり、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の道にもどる時である。

① ポノマリョフ「世界の共産主義者の勝利の旗じるし」、一九六二年十一月十八日づけのソ連の『プラウダ』紙に掲載

② ルメンツェフ「われわれの共通の思想的武器」、『平和と社会主義の諸問題』誌一九六二年第一号掲載

③ 一九六〇年九月二十三日、フルシチョフの国連総会での演説

④ 一九六〇年二月二十一日、フルシチョフのインドネシア・ジャバ・ジャカルタのジャザマダ大学で

の演説

- ⑤ 一九六〇年一月十四日、フルシチョフのソ連最高ソビエト会議での報告
- ⑥ 一九六一年十二月四日づけのソ連の『イズベスチャ』紙編集部の論文
- ⑦ 一九六一年十二月三十日、フルシチョフ、ブレジネフのケネディへの祝電
- ⑧ 一九六〇年九月二十三日、フルシチョフの国連総会での演説
- ⑨ 一九六一年七月五日、フルシチョフのソ連駐在朝鮮民主主義人民共和国大使館のレセプションでの演説
- ⑩ ポノマリョフ「革命運動の若干の問題」。『平和と社会主義の諸問題』誌一九六二年第十二号掲載。
- ⑪ ソ連の『コムニスト』誌一九六二年第二号八九ページ
- ⑫ ポノマリョフ「資本主義の全般的危機の新しい段階」、一九六一年二月八日づけの『プラウダ』紙掲載
- ⑬ 中国共産党中央委員会あてのソ連共産党中央委員会の一九六三年三月三十日づけの書簡
- ⑭ ソ連共産党中央委員会のソ連共産党各級組織と全党員への一九六三年七月十四日づけの公開書簡
- ⑮ ポノマリョフ「革命運動の若干の問題」、『平和と社会主義の諸問題』誌一九六二年第十二号掲載
- ⑯ ソ連共産党第二十二回大会の採択した『ソ連共産党綱領』
- ⑰ 一九六〇年一月十四日、フルシチョフのソ連最高ソビエト会議での報告

- ⑱ オーストリアのハンス・チリン教授の質問にたいするフルシチョフの回答、一九六二年一月三日づけ『プラウダ』紙掲載
- ⑲ 「国際共産主義運動の一致団結をめざして」、一九六三年十二月六日づけの『プラウダ』紙編集部の論文

⑳ 「われわれはニキタとどの程度まで仲よくせねばならないのか」、一九六二年三月九日づけのアメリカの週刊誌『タイム』の論文

㉑ 一九六三年八月十八日、アメリカ国務次官ハリマンのテレビ演説

㉒ 「ケネディ、フルシチョフをたすける」、イギリスの週刊誌『タイム・アンド・タイド』に一九六三年四月十八日から二十四日まで掲載された論文

㉓ AFPの一九六三年七月十四日ワシントン電、ソ連共産党中央委員会公開書簡にたいするアメリカ官刃筋の評論の総合報告

㉔ 一九六〇年四月二十日、元アメリカ国務次官ジロンのアメリカ外交政策についての演説

㉕ 一九五八年十二月四日、ダレスのカリフォルニア州商工会議所での演説

㉖ 一九六三年九月二十日、ケネディの国連総会での演説

㉗ 一九五九年一月二十八日、ダレスのアメリカ下院外交委員会での発言

㉘ 一九六一年十一月二十五日、ケネディの『イズベスチャ』編集長アジュベイとの会談

- ②9 一九六三年九月十日、ラスクのアメリカV・F・W・全国大会での演説
- ③0 一九五九年一月三十一日、ダレスのニューヨーク弁護士協会授賞祝宴での演説
- ③1 一九五八年十二月四日、ダレスのカリフォルニア州商工会議所での演説
- ③2 一九五九年二月八日、ダレスのアメリカ下院外交委員会での証言
- ③3 一九六〇年九月三十日、アイゼンハワーのシカゴのポーランド系米人大会での演説
- ③4 ケネディの『平和戦略』（一九九ページ）
- ③5 一九六〇年十月一日、ケネディのポーランド系米人大会での演説
- ③6 一九五六年五月十五日、ダレスのインタビュアーにおける談話
- ③7 一九五八年十月二十八日、ダレスのインタビュアーにおける談話
- ③8 N・N・ヤコフレフの『三十年来……』（ソ連がソ米国交樹立三〇周年を記念するために発行したパンフレット）
- ③9 N・N・ヤコフレフの『三十年来……』（ソ連がソ米国交樹立三〇周年を記念するために発行したパンフレット）
- ④0 一九六一年九月五日、フルシチョフのアメリカの記者サールズベーターとの談話
- ④1 一九六二年十二月十三日、グロムイコのス連最高ソビエト会議での演説
- ④2 一九五九年九月十七日、フルシチョフのニューヨーク市長の主催した宴会での演説

- ④3 一九六一年六月十五日、フルシチョフの放送テレビ演説
- ④4 一九六三年八月二十一日づけ『ブラウダ』紙評論員の論文

根本的に対立している二つの平和共存政策
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (六)

1964年1月 初版発行

定価 30 円

出版者 外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万荘)

発行者 中 国 国 際 書 店

(北京 P. O. B. 399)

編号: (日)3050-834

3-J-574P
00039

▲ ソ連共産党指導部とわれわれとの
意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

B 6 判 86ページ 定価40円

▲ スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (二)

B 6 判 34ページ 定価20円

▲ ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (三)

B 6 判 62ページ 定価30円

▲ 新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (四)

B 6 判 50ページ 定価20円

▲ 戦争と平和の問題での二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す (五)

B 6 判 54ページ 定価30円

出版者 北京 外文出版社

発行者 北京 中国国際書店

